

ペテロの手紙第二3章「万物が崩れ去っても」

1A 純真な心 1-2

1B 記憶による奮い立ち 1

2B 聖なる預言者と使徒たち 2

2A 嘲る者たち 3-7

1B 欲望に従った生活 3-4

2B 水の裁きの後の世界 5-6

3B 火による裁き 7

3A 遅れない神 8-9

1B 一日と千年 8

2B 忍耐深い方 9

4A 万物の崩れ落ちる日 10-13

1B 聖なる敬虔な生き方 10-11

2B 義の宿る新天新地 12-13

5A 堅実な営み 14-18

1B 平安のうちの出会い 14-16

2B 恵みと知識の成長 17-18

本文

ペテロの手紙第二 3 章を開いてください。

1A 純真な心 1-2

1B 記憶による奮い立ち 1

¹ 愛する者たち、私はすでに二通目となる手紙を、あなたがたに書いています。これらの手紙により、私はあなたがたの記憶を呼び覚まして、純真な心を奮い立たせたいのです。

ペテロの手紙第二、最後の 3 章に入っています。彼は第一の手紙を書いていました。そして今、この手紙、二通目となっています。彼は、第一の手紙を受け取っている彼らが、すでに知っていることを書いていることをよく知っていました。1 章 12 節で、「**与えられた真理に堅く立っている**」と書かれています。けれども、書いている目的が、「**あなたがたの記憶を呼び覚ま**す、ということです。

私たちは、すでに何度となく教えられ、すでに知っているものがあります。けれども、記憶の彼方に追いやられている事柄は多いですね。私の知り合いのクリスチャンが、最近、宮城県のある町

に行きました。津波の被災をそのまま残しているところがあります。そこに入り、衝撃を受けていました。私は、津波被災直後に何度となく現地入りした時に、「これをすべて片づけて、整備してしまったら、どうするのだろう？」と心配していましたが、あえて残していることに安心しました。なぜなら、それを遺していないと、あの時の記憶が消えていってしまうと思ったからです。

霊的にも、これと同じです。知っているとは言え、真理については何度も何度も呼び覚ます必要があります。そのことによって、次の世代に伝えることができます。今、私が読書会で、チャック・スミスの「恵みはなぜすべてを変えるのか」を読み進めているのはそのためです。私にとって、これこそが教会の方々になんとしてでも伝えたい内容です。聖書通読の学びによって、説教をしていくのは、単に、聖書の知識を受け取るのが、目的ではありません。この手紙の最後にある、イエス・キリストの恵みにおいて成長することです。そして、教えている私にとっても、何度も何度も聞いてきた内容なのですが、思い起こして、自分の思いと心をリフレッシュさせています。

そして、「純真な心を奮い立たせたい」というのが目的です。ペテロは、心が純真であることに気を使っています。第一の手紙では、「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と書いていました(2:2)。

私たちはどうしても、その純真さが他の悪い動機で汚れてしまいます。悪意、偽善、妬みなどによって汚されるでしょう(I ペテ 2:1)。偽教師によって、かつての罪に誘われているかもしれません。あるいは、初めの愛を置き忘れていることもあります。エペソにある教会に対して、イエス様は、偽使徒に対して、その偽りを暴いて、忍耐していたことをほめました。けれども、「黙示 2:4 あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」ちょうど、イエス様の種蒔きの喩えにあるように、いつの間にか世の思い煩いや惑わしによって、いばらが心の中に生えて、蒔かれたみことばの種が育たない、実を結ばないということがあるのです。ですから、すでに知っている事とは言え、思い起こさせる二通目の手紙を書いているのです。

2B 聖なる預言者と使徒たち 2

² それは、聖なる預言者たちにより前もって語られたみことばと、あなたがたの使徒たちにより伝えられた、主であり救い主である方の命令を思い出させるためです。

ペテロが思い起こさせている真理は、二種類の人々を通して語られた内容です。一つは、「聖なる預言者たちにより前もって語られたみことば」です。これは、もちろん、旧約聖書の預言者たちです。「聖なる」と言っていますね。自分の思いを勝手に語っているのではなく、神によって聖め別たれて、純粋な主のことばを語った人々です。1章の最後で、ペテロは、「預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。」と書いていました。もう一つは、使徒たちです。「主であり救い主である方の命令を思い出させるた

め」と言っていますね。使徒たちは、主が、昇天される前に彼らに対して、「マタ 28:20 わたしがあなたに命じておいて、すべてのことを守るように教えなさい。」と言いつけられていました。

2A 嘲る者たち 3-7

そこで次、3 節から、ペテロは「主の日」について語ります。主の日とは、旧約時代の預言者たちが、膨大に語っている世の終わりの日のことです。そして主イエスご自身が、オリーブ山において弟子たちに詳しくお語りになって、目を覚まして用意していなさいと命じておられたことです。ペテロは、このことを聖なる預言者たちが何度となく教えていたことであり、主イエスによってはっきりと命じられていたことを心得ています。それで第一の手紙で、「4:7 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。」と教えました。

はたして、今日の教会で、このことを本気に受け止め、信じているかどうか？が問われるのです。あるいは、一人一人の信者が、かつては本気で受け止め、信じていたけれども、時を経て、それほど真剣に捉えていないということが、あるのではないか？と思うのです。終わりの日の預言を教えていることが、偏っているとか、いかに危険であるとかという声まで聞こえます。私に言わせたら、むしろ預言者たちや使徒たちは、その逆、つまり終わりの日についてあまりにも軽視していることこそが、危険であるということです。

1B 欲望に従った生活 3-4

³ まず第一に、心得ておきなさい。終わりの時に、嘲る者たちが現れて嘲り、自分たちの欲望に従いながら、⁴ こう言います。「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」

「まず第一に」というのは、順番というよりも、優先順位です。「第一に大事なものは」と言い換えてよいでしょう。終わりの時を嘲る者たちが現れる、というのが第一に心得ておかなければいけないということなのです。2 章で、偽預言者について話していましたが、主が来られて、万物の終わりが来るということを、偽教師たちは嘲るのです。

その原因をペテロは書いています。「自分たちの欲望に従いながら」ということです。世の終わりが近いということを語ることには、勇気が要ります。それは、今の世にある楽しみを楽しまないという決意でもあるからです。世と世の欲は過ぎ去ります。しかし、世にあるものを楽しむことを選ぶ時に、主が来られるというこや面倒、厄介になるのです。イエスが、悪いしもべの喩えを語られた時、こう言われました。「マタ 24:48-49 しかし彼が悪いしもべで、『主人の帰りは遅くなる』と心の中で思い、仲間のしもべたちをたたき始め、酒飲みたちと食べたり飲んだりしているなら」ということです。主が速やかに来られることを否定するのは、この世への思い煩いとつながっているのです。

彼らの言い分は、「父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」というものです。父の時代に、主が来られるということが強く信じられていました。ところが、次の世代になっても、一向に戻ってこないということです。今、ペテロが活着ている時でさえ、すでに主が天に戻られた後、30年は経ています。ですから、自分の活着ているうちに主が戻られると生きていたのが、結局、戻ってこないではないか？という言い訳なのです。私は、こういった話を数多く聞きます。キリスト教会の中で、主が戻ってこられることに熱狂した人々が、10年、20年待っても来なかったのに、激しく、その教えを叩いているのです。

2B 水の裁きの後の世界 5-6

⁵こう主張する彼らは、次のことを見落としています。天は大昔からあり、地は神のことばによって、水から出て、水を通して成ったのであり、⁶ そのみことばのゆえに、当時の世界は水におおわれて滅びました。

「こう主張する」という言葉のギリシア語には、「意図的に否定する」という意味合いもあるそうです。もっともらしい主張でも、決定的な事実を見落としているのです。出来事に欠如しています。それは、ノアの時代の洪水です。

「天は大昔からあり、地は神のことばによって、水から出て、水を通して成った」とペテロは言っていますが、天地創造の記述を思い出してください。天は天で神は造られましたが、地については二日目、大空の上にある水と、大空の上にある水に区別されています。そして三日目に、その下にある水について、「創 1:9 天の下の水は一つの所に集まれ。乾いた所が現れよ。」すると、そのようになった。」とあります。その乾いたところを、主は「地」と名づけました。ですから、聖書的には、地上に水があるというよりも、地が水から出てきたというほうが正解です。

そして、ノアが箱舟を造り、その家族が入り、また動物の雄雌が入った後に、雨が降りましたね。そこにある記述を読んでみましょう。「創 7:11 ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日、その日に、大いなる淵の源がごとごとく裂け、天の水門が開かれた。」天の上に水があったところが、それが開かれて、雨が降りました。それだけでなく、大いなる淵の源からも水があふれ出てきました。それで、世界が水で覆われたのです。

ですから、主が敢えて水を抑えておられたからこそ、地があったのであって、少しでもその水を留めておくという働きを変えたら、比喩的に言えば、神がご自分の指をほんの少しでも動かせば、またたく間に、地上にいる生き物は消え去ることなのです。だから、いつまでも変わらないではないかと嘲ることは、こうした神への思い、恐れ敬いがないということで愚かな発言なのです。

それから、ペテロが強調しているのは、そららが「みことば」によって成っていた、ということです。

主が語られて、そのようになっています。ですから、同じみことばをもって、主は預言者を通して語られているのです。それらのことばが、成就しないで無に帰することはないのです。「イザ 55:11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。」

3B 火による裁き 7

ですから、預言者たちが火による裁きを語っている時に、そのみことばは、そのまま成就するということなのです。

⁷しかし、今ある天と地は、同じみことばによって、火で焼かれるために取っておかれ、不敬虔な者たちのさばきと滅びの日まで保たれているのです。

火に焼かれる預言は、数多くあります。詩篇 50 篇 3 節です。「私たちの神は来られる。黙ってはおられない。御前には食い尽くす火がありその周りには激しい嵐がある。」イザヤ 66 章 15 節です。「見よ。【主】は火を伴って進んで来られる。その戦車はつむじ風のように。主は激しい憤りをもって、怒りを下し、火の炎をもって、叱責を下す。」

そして、「不敬虔な者たちのさばきと滅びの日まで保たれている」とペテロは言っていますが、マラキ 4 章 1 節には、こうあります。「見よ、その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行う者は藁となる。迫り来るその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。」そして新約聖書にも、ペテロの他にパウロも同じことを話しています。テサロニケの手紙第二 1 章 7-9 節です。「このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。そのような者たちは、永遠の滅びという刑罰を受け、主の御前から、そして、その御力の栄光から退けられることとなります。」黙示録には、数多く、天からの火によって地上が裁きを受けている幻が出てきます。

これらのことは、比喩的であると主張する神学者がいることについては、前回の午前礼拝の説教でお話ししましたね。その神学者に限らず、キリスト教会には、火による裁きは、神の愛のご性質にはそぐわないとかいう理由で、語らない、あるいはあからさまに否定することがあります。そうであれば、水による裁きも比喩であったということになりますね。ペテロは、歴史的に、事実、起こったという前提でノアの時代の洪水を語りました。同じように火による裁きも語っているのです。

3A 遅れない神 8-9

そうは言っても、やはり、遅れているのか？と感じる、素直な疑問に対して、ペテロは次に誠実に回答します。嘲るための主張と、素朴な疑いには大きな隔たりがあります。

後者に対しては、イエス様も、実はバプテスマのヨハネに対して答えておられました。彼は、自分が主の前に来る使者として、マラキの預言を意識していたに違いありません。そして同じマラキが、火による裁きを、先ほど引用したように預言していました。彼は、ヘロデによって牢屋に投げ入れられました。その時に、イエス様に使者を送ったのです。果たして、あなたが来るべき方なのか、それとも他の方を待ち望むべきか？と。バプテスマのヨハネも、すぐにでも火による裁きがあるはずなのに？と思ったのです。けれども、イエス様は、イザヤが預言した、メシアが行われる奇跡に言及されました。目の見えない人が見えるようになり、耳の聞こえない者たちが聞き、死人がよみがえり、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられていると。そして言われます、「だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。(ルカ 7:23)」

ペテロは、聖霊が自分たちに注がれて、異言を語った時から、それがヨエルの預言の成就として引用しましたが、それはまさに、主の日、天地に神が御怒りを現す幻になっています。彼も、間もなく皇帝ネロによって処刑に処せられる中、すでに 30 年経っている中で、まだ主が来られないのではないかと、遅いという思いを抱く人々に同情するのです。

1B 一日と千年 8

⁸しかし、愛する人たち、あなたがたはこの一つのことを見落としてはいけません。主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。

主が永遠に生きておられる方なので、私たちにとって千年という、途方もなく長い期間も、一日のようにみなされます。詩篇に、そのことが語られています。「90:4 まことにあなたの目には千年も昨日のように過ぎ去り夜回りのひと時ほどです。」私たちの感じる、物理的な時間が、神の前には存在しないのです。

2B 忍耐深い方 9

⁹主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

ぜひ午前礼拝の説教を、聞いていない方は後で聞いてください。遅いように見えても、遅れることはないという内容でお話しました。主は、いつでも来ることはおできになります。けれども、ちょうど、ソドムの町にロトがいるまでは裁きを下せなかったように、悔い改めに進む者がいるならば、主はなんとでも、ご自身の怒りから救い出したいと願われているので、忍耐して待つておられるのです。主の忍耐深さが、遅いように感じさせる原因なのです。ヨナの預言を読んでもそうですね、アッシリアの首都ニネベを、今すぐにでも滅ぼしてほしいとヨナは願いましたが、神は、ニネベの人々が、必死になって悔い改めようとしていたので、思い直されたのです。ずっと後になって、ナ

ホムの預言に記されていますが、ニネベに対する神の復讐が行われることが預言されています。裁きは行われるのですが、人々の悔い改めに応じて、忍耐深く待つておられるのです。

4A 万物の崩れ落ちる日 10-13

そして、それは、主が悪に対して妥協しておられるとか、そういうことでは決してないのです。主は、ご自分の定めた時に確実に、今の天と地を過ぎ去らせます。

1B 聖なる敬虔な生き方 10-11

¹⁰ しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまいます。

「主の日」は、何でしょうか？教会の人たちに聞けば、どれだけの人が答えられるでしょうか？多くの人は、「日曜日」というのかもしれませんが。けれども、そういった意味で「主の日」は出てきません。大半が、ほぼすべてが、主がご自身の怒りを下され、天と地が過ぎ去ることでクライマックスに至る、主の定められた日として出てきます。「ヨエ 1:15 ああ、その日よ。【主】の日は近い。全能者による破壊の日として、その日は来る。」今、旧約時代の預言者を引用しましたが、「いや、新約聖書では日曜日でしょ？」と言い張る人がいるかもしれません。いいえ、パウロは、預言者たちと同じ意味で、解き明かしています。「I テサ 5:2-3 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみか臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」

今、読んだように、これは盗人のようにやって来ます。つまり、自分の持っている物、自分が誇りとしていることが、突如として取り去られます。主を誇りとして、主と共に生きることが幸せである人にとっては、盗人ではありません。主とみことばは、いつまでも残るからです。

万物の終わりが来ます。ペテロはここで、天に響きがあつて、それで天の万象が焼けて崩れ去ること。それによって、地と地にある働きがなくなることを述べています。イザヤが預言しました、「34:4 天の万象は朽ち果て、天は巻物のように巻かれる。その万象は枯れ落ちる。ぶどうの木から葉が枯れ落ちるように。いちじくの木から実がしぼんで落ちるように。」イエス様も語られました、「マタイ 24:29 そうした苦難の日々の後、ただちに太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされます。」

¹¹ このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならないことでしょう。

主の日について思う時、私たちはこのことを真剣に考えないといけません。「聖なる敬虔な生き

方」とは、この世にある罪や汚れから離れ、主を恐れかしこむ生き方です。使徒ヨハネが、第一の手紙で言いました。「2:17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」と言いました。

チャック・スミスの話がとても分かり易いので、分かち合います。アメリカは車社会で、車がとても好きで、彼も例外ではありません。とても安い車に乗っていましたが、ある方が、新車、しかも高級なものを贈り物でくれました。彼はとっても心が浮かれていました。主よ、ありがとうございます！と、ほめたたえていました。そしてスーパーに行き、駐車場に停めました。帰ってきたら、なんと、わずかに傷がついています！まだ自宅に戻ってもいないのに、なんと新車に傷をつけた人がいます！ものすごく怒りました、先ほどの賛美は呪いになりました。

そして自宅に戻ると、息子チャック Jr.がいました。彼が、「お父さん、新車で帰ってきたんですよ？」ということで、見に行きました。彼もわずかな傷に気づきました。それでとても気分をお父さんが害しているのを見て、こういったのです。「これも、燃え尽くされてしまうよ。」チャックは、「そのとおりだ！」と、今の知恵ある言葉に感謝したのだそうです。どんなに、恰好いい車でも、燃えてなくなってしまうのです。

ですから、私たちは万物が過ぎ去るとき、自分が果たして、それらにより頼んでいないと言えるのかどうか？吟味しないといけないということです。世に対しては、軽く付き合うとよいという言葉があります。世から離れて生きるのは、みこころではありません。イエス様は、人々の間に住まわれました。けれども、自分は世に属していません。なので、世にあるものについては、身軽な付き合いをしていきなさいということです。パウロはこれを、持っている者は持っていないようにしていきなさいという言葉で勧めています(1 コリント 7:29-30)。

2B 義の宿る新天新地 12-13

¹² そのようにして、神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。

「到来を早めなければなりません」とは、何のことなのでしょう？イエスは、ご自身が戻られる日について、「父がご自分の権威をもって定めておられることです。(使徒 1:7)」と言われました。父なる神はすでに、主の到来の日を定めておられます。けれども、早めなければいけないというのは、私たちの方で、その日を迎えることができるように、しっかり備えなければいけないということです。私たちは、自分の都合の良ように解釈してしまいがちです。主が時を定めておられるから、自分たちが何を行なっても行なわなくても、運命のように定められているのだから、ただ黙って、何もしないで待っていようと考えてしまいます。

けれども、イエス様は、「御国が来ますように。」と祈りなさいと命じられました。御国が来ますようにと祈りながら待ち望む中で、早く来てくださいという期待なくして祈ることができるでしょうか？できませんね。11節で読んだように、私たちがしっかりと聖なる敬虔な生き方に徹していることによって、主人のお帰りを待つことができます。

さらに、神の救いのご計画には、福音が宣べ伝えられて、それから御国が来るというものがあります。「マタ 24:14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」そしてイエス様は、一ミナの話がされた時に、商売をしなさいと言われたのです。ですから、神の日を待ち望むというのは、何もしないでぼおっとしていることではなく、むしろせつせと、聖く生きることに努め、主にあつて労苦することが含まれているのです。そういった意味で、「到来を早めなければなりません」とペテロはここで言っているのでしょう。

¹³しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。

新しい天と新しい地です。これは、イザヤの預言で啓示されている、最後の姿です。「65:17 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。先のことは思い出されず、心に上ることもない。」ヨハネが黙示録で同じ啓示を受けています。千年間の地上統治の後で、こうあります。「20:11 また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。」そして最後の審判があり、それから新しい天と新しい地の幻があります。

そして、ペテロはそこが「義の宿る」ところであることを強調しています。新天新地においては、死がなくなり、苦しみや嘆きが過ぎ去る、すべてが新しくされるということが、しばしば強調されていますが(黙示 21 章)、正義が宿るところでもあります。罪や不義を行なっている者たちは、そこにあずかることはできない、彼らの分け前は火の池であるということも書かれています。ですから、新天新地を待ち望むことのできる人は、義に飢え渴いている人です。イエスが、義に飢え渴いている者は幸いです、その人たちは満たされるからと言われましたが、まさにその通りで、悪や罪を憎み、神の義に飢え渴いているからこそ、期待して、待ち望むことができます。

5A 堅実な営み 14-18

1B 平安のうちの出会い 14-16

¹⁴ですから、愛する者たち。これらのことを待ち望んでいるのなら、しみも傷もない者として平安のうちに神に見出していただけるように努力しなさい。

主を待ち望む者たちが、この方にお目にかかる時に、恥ずかしくないように整える姿勢を教えています。まず、「しみも傷もない者として」と言っています。これは、いけにえに使われている表現であり、生まれつきの欠陥は「しみ」と呼ばれます。そして、生後に加えられた傷は「傷」と呼びます。

主の前に対して、しみや傷があってはなりません。しかし私たちは生まれながらにして罪人で、罪を犯した者です。しかし、キリストのその尊い血によって私たちは、罪が取り除かれました。そして、罪の中に留まらないようにされました。その状態を保っていなさいということです。

パウロも、この勧めを行っていました。例えば、「ピリ 1:10-11 あなたがたが、大切なことを見分けることができますように。こうしてあなたがたが、キリストの日に備えて、純真で非難されるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と誉れが現されますように。」と言っています。

そして、「平安のうちに神に見出していただけるように努力しなさい」と言っています。コリント第一に、私たちの働きが、イエス様が火とともに現れて、その真価が試されることが書かれています。そして、残っているものにしてがって報いを受けますが、その働きが焼けてしまっても、「3:15 だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。」とあります。これでは、ペテロがここで話しているような、「平安のうちに神に見出していただける」ということではないです。

平安があるのは、キリストの命令に留まっている時に得られます。使徒ヨハネも言いました、「Ⅰヨハ 3:19-21 そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」たとえ心に責めがあっても、主は守ってくださるけれども、できれば、心に責めがない時に、神の御前に確信がある、つまり、平安のうちに見出されるのだよ、ということです。

¹⁵ また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。愛する、私たちの兄弟パウロも、自分に与えられた知恵にしたがって、あなたがたに書き送ったとおりです。

「主の忍耐」とは、先ほどペテロが話した、主が忍耐されて、すべての人が悔い改めに進むようにしておられる、ということです。

そしてペテロは、「愛する、私たちの兄弟パウロ」と言及しています。ペテロとパウロの関係は、ペテロがユダヤ人への使徒であり、パウロが異邦人への使徒でした。ですから、異なる人々への働きかけをしているのですが、ガラテヤ書を見ますと、互いに交わりがあり一致していました。違うことを教えているように見えて、同じことを信じていました。今も、ペテロが書いていることについて、何度となく同じことを語っているパウロの手紙を引用しました。

¹⁶ その手紙でパウロは、ほかのすべての手紙でもしているように、このことについて語っています。その中には理解しにくいところがあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所と同様、それらを曲解して、自分自身に滅びを招きます。

パウロは手紙を書いた時に、彼自身が、曲解する者たちに対して警告しています。例えば、神の恵みと、信仰による義を強調したために、「罪が増し加わるところに、恵みもあふれました。(ロマ 5:20)」という言葉がありました。けれども、それを罪に留まってもいいのだと曲解する者たちがいたのです。それでパウロは、「6:2 決してそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるでしょうか。」と問い直しています。

「無知な、心が定まらない人」と言っていますが、まだ、よく聖書によって訓練を受けていない人が、自分勝手な解釈で曲解してしまい、恵みを放縱に変えてしまう危険があります。このことに対する注意喚起をペテロは行っています。パウロの言葉に限らず、聖書の他の箇所でも行っていると指摘しています。まだ、霊的に幼いのです。

2B 恵みと知識の成長 17-18

そこで、ペテロは次の勧めをもって、手紙をしめくります。

¹⁷ ですから、愛する者たち。あなたがたは前もって分かっているのですから、不徳な者たちの惑わしに誘い込まれて、自分自身の堅実さを失わないよう、よく気をつけなさい。¹⁸ 私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。イエス・キリストに栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。

することは二つです。「気をつける」と、「成長する」ことです。どちらもします。自分の堅実さを失わないように注意すること、そして成長することです。これを同時に行います。言い換えれば、成長することが、惑わしにも自分自身を守ることになるのです。

ペテロは、第一の手紙から、「堅くする、強くする」という言葉を大事にしていました。例えば、「5:10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあって永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの後で回復させ、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」私たちは神の恵みの中で、信仰が堅くされます。強められます、そしてぶれることのない、不動の者となります。恵みと聞くと、それは、あたかも自分の気持ちや、思い付きで動いていように聞こえるかもしれませんが、とんでもないことです、むしろ、これまで心定まらない状態だったのが、恵みを知って、心を、主にあって堅く定めるのです。その中で、不徳な者たちがいても、誘いこまれることはなくなります。

次に、成長することですが、これが第二の手紙のまとめです。「私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」ということですが、まず、恵みにおいて成長します。どれほど、恵みを強調してもしきれないものです。なぜなら、主のみこころだからです。この方の恵みを知って、それでこの方への信頼を増し加えてください。それから、知識において成長します。この知識とは、知的なこと以上に、霊的なこと、人格に触れることです。イエス様を親密に、人格的に知るのです。

そのことによって、私たちを通して、「イエス・キリストに栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように」となります。私たちが恵みに触れて、イエス様を知れば知るほど、この方が私たちを通してご自分の栄光を現されます。そしてその栄光は、永続するものです。一時的な栄光で、過ぎ去るものではありません。私たちは一時的なことに、目を留めてしまいがちです。そうではなく、永遠に残るもの、永遠の栄光につながるものを求めます。